

郝經續後漢書と蒙古人の慣習

元の郝經が、世祖中統元年宋に使して、賈似道に
 抑留された十六年間に、著した「續後漢書」には、
 四夷傳があつて、「永樂大典」から復原された今本に
 も同傳の大部分が残存してゐる。

其中、彼が匈奴の風習として傳へてゐる個處は、
 流石に、元朝蒙古に仕へた人だけに、相當詳しいもの
 のがあつて、史漢匈奴傳の曖昧な點が氷解すること
 が多い。之は彼が當時蒙古に傳つてゐた固有の習俗
 を、蒙古族の祖先である匈奴の遺風と認めて書き記
 したものに相違ないから、吾々は匈奴のやうな古い
 時代から、元朝に至る迄一貫して蒙古の地に傳つた
 古い習俗として之を解して差し支へないと思ふ。

蒙古人の習俗に關しては、宋の孟珙や歐羅巴のマ
 ルコポーロ、ルブルクの様、寧ろ外部の人々によ
 つて傳へられてゐるものが多く、元朝側の人によつ
 ての纏つた記録は案外に尠いから、斯様な點から謂
 つても、郝經の記録は面白いものゝ一つと謂へる。

史漢匈奴傳によると、左右賢王以下當戶に至る「萬

騎」(之は通説の如く蒙古語)と稱された二十四長は各々分地を有つたが、郝經は、(1)この分地の左右への連りは圍獵・戰陣に於ける排列の順次となつて其次を易へず之を「把手」と呼び、(2)職官では左をたつとぶも、坐列では右を上としたと傳へてゐる。

また(3)色は白を上び、黒を凶服とし(4)卽位・拜官・勤見・大慶・會祠・祭天神には皆白服白馬を以てし之を「白道」といつたといふ。(平服の色を彼は傳へてゐない。が、匈奴と同様に蒙古民族の祖先に當つた東胡鮮卑は、風俗通の傳へる處では褚衣を常用してゐたものであり、(唐代回紇も同様)、また御覽所引廣志によれば烏丸は木横を朱染して冠りものとしてゐたのであるから、匈奴も亦或は同様であつたのではあるまいか。)

アルメニアの史家は、蒙古人が、主人にも奴隸にも同じ食物を出すの特筆してゐるが、郝經も亦(5)肉を食ひ湏酪を飲み、君長より奴婢に至る迄、多寡を均しくし、飲食を同じくしたといふ。

其他(6)將に戰はんとする、先づ馬の壯にして肥駿

久しく乗らざる者を探つて之を羈縻し、芻秣を禁じ
 飲水を減ずる。これを「去油腸」といひ、かくする
 こと一兩日、一人數騎を兼ね、晝夜馳突して憊れず。
 (7)約信を重じ、數千里の遠出と雖も歳年、其期を愆
 らぬ。(8)名を以て號と爲し、諱せず字無く。(9)醫巫
 を尊び、東上に坐せしむ。諸大人入見すれば、巫を
 して火前を占めしむ、之を「過火門」と謂ふ。(10)凡
 そ官に命じて軍を出す、羊髀を焼いて吉凶を視る。
 (11)主死して子及び親族無き時は、奴その家をとる。
 (12)尤も雷霆を畏れ、馬牛羊の震死するときは、群を
 擧げて之を棄つ。(13)其の送死、棺槨金銀の衣裳あつ
 て封土標樹無く、馬を馳せて其上を踐み、其旁を馳
 せ、復た識る可らざらしめて後ち已む。(14)死者あれ
 ば號哭し、衆、酒酪を以て之に飲ましめ之を「添涙」
 といひ、(15)馬牛羊を殺して祭り之を食ひ、其骨を焚
 く、之を「燒飯」といふ(16)婦の夫に事ふること、舅
 姑に事ふる如く、湮酪氈毳皮革車服器用すべて婦人
 が之を作る。男子、朝出、婦人馬を捉へ鞍勒を加へ
 弓矢をとり、騎去るを見送る。軍中に在つては營落
 輜重畜牧等に當り、妒せずして勤勞に服す云々。

勿論、是等の中には蒙韃備錄やマルコポーロ紀行
 その他によつて、既に知悉されてゐるものもある
 が、上述の如き意味に於いて、改めて注目されてよ
 い文献といへやう。清の郭松年續後漢書札記の序文
 にも知られる様、嘗ては相當稀觀であつた本書も
 今では排印本すら普及してゐる。が、何分大部分が
 三國志の燒直しといふ所から、漢魏史の史料として
 は使用されない。然し上述の様な點からは、もつと
 援用されるべきものと思ふ。東夷傳に「句麗別部曰
 渤海、其東際海西接遼東中略至修人高歡逐魏孝武帝
 云々」と、途方も無い後世の事を叙べてゐる所等が
 却つて本書の身上である。尙上掲郭氏の札記が三國
 志・范史・晋書との一字一劃の異同を刻明に擧げ乍
 ら數行に亘る郝經の加筆については一向に無關心で
 あるのは面白い現象である。

* 元胡三省も通鑑注に漠北之俗死者停屍於帳子孫及親屬男
 女各殺牛馬陳於帳前祭之遠帳走馬七匝云々といふ。

** マルコポーロの謂ふ蒙古婦人の幌車、天幕の撤去設置。

(内 田 吟 風)